

津波の記録を碑に刻む

安政元年（1854）11月5日の安政南海地震では、四国各地で津波による大きな被害が出ました。津波の恐ろしさや教訓を後世の人々に伝えるために、石碑などに先人のメッセージが刻まれています。今回は徳島県阿南市の椿八幡神社の常夜燈礎石と高知県土佐清水市の五味天満宮の石碑をご紹介します。

■椿八幡神社の常夜燈礎石（徳島県阿南市）

安政元年（1854）11月4日四ツ時（午前9時頃）に安政東海地震が発生し、その翌5日夕七ツ時（午後4時頃）に安政南海地震が起こりました。椿八幡神社の常夜燈礎石の碑文によると、4日の地震では津波が堤防を越えて川筋奥深くまで入りましたが、その後海上は静かになりました。5日の地震では、酉の刻（午後6時頃）に見上げるばかりの高さの津波が来たので、若い人は年寄りを助け、幼い子どもを携えて山に登って避難しました。山に登って村内を見ると、津波は香の谷中村まで達し、家屋の流失9軒、浸水18軒、埋没水田30余町の被害が出ましたが、氏子たちの身が無事だったのはこの御神の加護のおかげであるという趣旨のことが記されています。<田所一太著「椿村史 昭和十五年十月刊復刻版」2021年、阿南市史編さん委員会編「阿南市史第2巻」1995年など>



■五味天満宮の石碑（高知県土佐清水市）

安政元年（1854）11月5日昼七ツ時（午後4時頃）大地震が起こり、間もなく大潮入り来たり、下茅（現土佐清水市下ノ加江）では浦分の家と蔵が一軒残らず流家となりました（大西家文書による）。この大津波に関する石碑が五味天満宮に建てられています。この碑には「頃は嘉永七寅年十月より潮くるひ、十一月四日すゝなみ来り、五日大地しん、間もなく大しほ入来る、向ゝ潮くるひ候時は大へんところろに用心すへし」と記されています。この碑は元伊豆田坂にあったものを、伊豆田トンネル工事のために昭和31年に下ノ加江の天満宮境内に移設したとのこと。<橋本登著「下茅の歴史」1970年、土佐清水市史編纂委員会編「土佐清水市史下巻」1980年など>

